期待抱かせる2位

盛實が敢闘賞、フィリップ優秀選手賞

ゴール下に切り込む盛實（10月29日、青山学院大戦）＝撮影・冨樫幸恵（文3）

関東大学バスケットボールリーグ戦＝9月9日～10月29日、駒沢オリンピック総合運動場ほか

リーグ終盤まで優勝争いを演じ、優勝は逃したものの、11勝7敗で昨年の4位を上回る2位となった。11月20日から始まる全日本大学選手権（インカレ）の上位シードを獲得し、大学日本一に向けて期待を抱かせる結果を残した。

個人では盛實海翔（商2・能代工高）が敢闘賞、アブ・フィリップ（経営2・アレセイア湘南高）が優秀選手賞、リバウンド王を獲得した。

開幕戦で拓大との接戦を制し、白星スタートするも、その後は勝ち負けを繰り返し、一時は4連敗で下位に低迷。しかし第11節の大東文化大戦の勝利を皮切りに破竹の7連勝で、リーグ終盤は拓大と優勝争いを演じた。

佐々木優一監督は「中盤に失速してしまったが、チームとして立ち直ることができた。特に4年次生は自分たちが引っ張っていくんだという気持ちが発言や行動に表れており、彼らの成長がチームの成長につながった。選手たちからは大学日本一を狙おうという声が出ている。またチームを一つにして、インカレの頂点を目指す」と振り返った。

（高岡要・経済3）

2部優勝

入れ替え戦進出

関東大学ラグビーリーグ戦（2部、6戦目まで）＝9月17日～11月5日、各大学グラウンド

専大はここまで6戦全勝。1部復帰に向けて順調に白星を重ね、最終戦（11月19日、東洋大戦）を残して2部優勝、1・2部入れ替え戦進出を決めた。

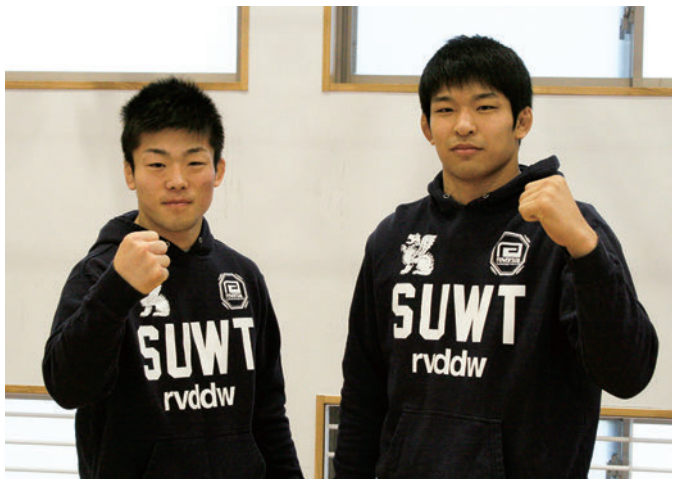
初戦で国士舘大に59―3で快勝し勢いに乗ると、その後の試合でも大差で勝利。5戦目では2位の立正大を相手に苦戦を強いられるも33―27で振り切った。

今年は目立った故障者もおらず、常にベストメンバーで戦うことができており、首位に立てている要因の一つといえる。ここまでを振り返って、松土治樹主将（経済4・日川高）は「年々、選手層が厚くなってきていてチームの成長を実感している。最後までやるべきことは変わらない。日ごろの生活が試合に影響するので日々、規律を守り、気を引き締めていきたい」と意気込みを語った。（白鳥順也・経済1）

トライを決める松土主将＝朝鮮大学校戦

66kg級 松井
85kg級 松雪
3位入賞

全日本大学レスリング グレコローマンスタイル選手権＝10月21、22日、平塚市・平塚総合体育館



松井（左）と松雪

男子66kg級で松井涼（商4・岐阜工高）、同85kg級で松雪泰成（商2・星城高）がともに3位に入賞した。

階級を一つ上げて大会に臨んだ松井。「パワーがまだまだ足りない」と語るように、準々決勝で今年のグレコ世界選手権を制した日体大の文田選手に敗れたが、「切り替えることができた」と3位決定戦で神大の勝野選手に勝利。「決勝に進むことができず悔しい結果だったが、十分に実力は出せた」と振り返った。

フリースタイルを主戦場とする松雪は「グレコを主とする選手に正面から渡り合っても勝てないので、フリーの技術でいかにカバーしながら戦うかを工夫した。怖がらずに攻めれば、結果は違ったのではないか」と悔しさをにじませた。（藤森峻祐・文2＝写真も）

国体グレコ66kg
河名さんが優勝

9月30日から10月10日まで、愛媛県で開かれた国民体育大会に現役、卒業生が出場した。

グレコローマン66kg級で卒業生の河名真寿斗さん（平29文、福島県代表）が優勝。フリースタイル57kg級では山北渓人（経済3・いなべ総合学園高、三重県代表）が準優勝を果たした。

（藤森）

女子単 谷澤が3位に

全日本総合出場

全日本学生バドミントン選手権＝10月21～26日、愛知県・一宮市総合体育館

女子シングルスで谷澤安衣（商2・日本橋女学館高）が3位入賞を果たした。この結果、11月27日から行われる全日本総合バドミントン選手権の出場権を獲得した。

準々決勝は第1セットを先取され後がなくなるも、フルゲームまでもつれ込む接戦を展開。この試合を制して準決勝に駒を進めたが、準決勝はストレートで敗れた。

「まさか自分でもベスト4までいけると思っていなかった。一試合一試合を必死でプレーしたことが結果につながった」と振り返った。

谷澤は、桶田彩乃（商3・西武台千葉高）とペアを組んだ得意のダブルスでは、「昨年の成績（ベスト16）を超えたいと思っていた」と話す通り、ベスト8入りし、大会を終えた。

（桐生紗希・商1）

フットワークを利かせ、腕を伸ばしてシャトルを拾う谷澤

500㍍で石川自己ベスト更新

Jr日本代表に

全日本スピードスケート距離別選手権＝10月20～22日、長野県・長野市オリンピック記念アリーナ

500㍍に出場した石川斗来（経営1・白樺学園高）が自己ベストを更新する35秒73で15位。11月25、26日にドイツで行われるジュニアワールドカップ競技会の日本代表に選出された。

今シーズン最初の大きな大会で結果を残した石川。周りの選手と比べて小柄ではあるものの瞬発力があり、思い切りの良さを生かしたスタートダッシュが持ち味だ。カーブでスピードに耐えられる力強さも持ち合わせ、コーナーで大きく失速することもない。石川も「タイムが伸びてきているので、この調子で今後も大きな大会に出たい」と意気込み十分だ。

辻本一史主将（経営3・帯広農高）も「ドイツに行って、ぜひメダルを獲得できるよう頑張ってほしい」と石川に声援を送った。

（高田康平・経営1）

石川のコーナリング

8勝5敗で2位

東都大学野球秋季リーグ戦＝10月26日まで、サーティーフォー相模原球場ほか

目標としていた1部復帰こそかなわなかったが、8勝5敗1分け勝ち点3の2位で終え、来季に期待を持てる順位でリーグ戦を終えた。

大きく貢献したのが投手陣。エースとしての存在感を示した高橋礼（商4・専大松戸高）が最多勝。堀田竜也（経営4・常葉学園菊川高）、角谷幸輝（商2・専大松戸高）らが試合を作った。

打線では春季同様に安打を量産した福永裕基（文3・天理高）、主砲として結果を出した平湯蒼藍（経済2・海星高）に加え、秦匠太朗（経営3・二松學舎大附高）など来季に向けて楽しみな打者がそろっている。

チームバッティングに徹し、守備時は積極的に声をかけるなどプレーでチームを引っ張り続けた和田裕生主将（経済4・福岡大大濠高）ら4年次生が抜けるが、今季経験を積んだ下級生たちが1部復帰を果たしてくれることを期待したい。

（八代哲・経済1）

箱根への道険し

東京箱根間往復大学駅伝競走予選会＝10月14日、立川市国営昭和記念公園

専大はチーム一丸となり4年ぶりの予選突破を目指したが、10時間13分40秒で総合14位に終わり、本大会出場には届かなかった。

20㌔の合計タイムは昨年より11分20秒短縮、本選出場のボーダーラインまで3分6秒に迫った。

チームトップは1時間23秒で個人36位となった長谷川柊（商2・八海高）。長谷川淳監督は「来年は確実に60分を切ってくれるはず」と期待を寄せる。

長谷川監督は「4年次生がチームをまとめてくれたこと、予選会を想定した集団走やロード練習を増やしたことがタイムにつながった。予選会にさらに焦点をあてた練習にしていく必要がある」と話した。

専大陸上競技部の挑戦は続く。

なお、関東学生連合には長谷川が選出され、長谷川監督もコーチを務めることが決まった。

（温井結・商3）

訂正

10月号8面の「全日本学生ローラースケート選手権」の記事で、女子スピード部門優勝とあるのは「準優勝」の誤りでした。おわびして訂正します。